

広島式典 本県遺族見送り

原爆投下から71年目の夏。広島市の平和記念公園で6日に行われる平和記念式典に、本県の遺族代表者は派遣されない。最近では遺族の高齢化が進み、派遣を見送ることも珍しくなくなったが、派遣見送りは戦後70年の節目を挟み3年ぶり。来年以降も派遣の見通しは立たないままだ。県内在住の被爆者でつくる県原爆被害者協議会(県被団協)の活動に取り組む会員はますます減り、記憶の継承への危機感が募っている。

(石井賢俊)

記憶継承へ募る危機感



修学旅行に向かう中学生の事前学習として、広島で被爆した自身の経験をありのままに語る中村さん(77歳、佐野高付属中)

高齢化、来年以降も困難

平和を考える

とちぎから

「この世のものとは思えない、ひどいありさまだ」。県被団協の事務局長を務める壬生町本丸2丁目、中村浩さん(88)の記憶は今も鮮明だ。

1945年8月6日午前8時15分、兵役中に広島で被爆した。爆心地から海を隔てて約20時の江田島にある軍施設で朝食中だった。

青白い光がピカッと光り、爆風で食堂の窓ガラスが吹き飛んだ。外を見ると、広島が真っ白い煙に包まれている。風も雲もないきれいな青空にきこの雲がもくもくと立ち上った。「普通の爆弾でない」と悟り、「一体全体この後どうなってしまうのか」と底知れぬ不安を感じた。

投下3日後から1週間、救護部隊の応援として広島

に入った。野ざらしになり、脚にウジが湧く被爆者が路上のそこかしこにいた。「水を」とせがむ人たちの体はほとんど動かない。その目だけが、じっと中村さんらを追った。

長い年月がたち被爆者の高齢化は進んでいる。県被団協会員の平均年齢は約80歳。約140人の会員のうち、日常的に連絡が付く人は10人にも満たない。

中村さんは「遺族」ではなく、県遺族代表としての平和記念式典参加はできない。式典は年に1度、全国の遺族が集まり祈りをささげる貴重な機会だ。「参加は『当たり前』だが、皆、高齢。暑さもあり、無理強いはいできない」と思う。

県被団協は約10年前から、広島への修学旅行の事前学習として、中高生向けの講話に積極的に取り組んでいる。

7月、中村さんは佐野高付属中の3年生に、記憶している「ありのまま」を語り、念じるようにこう締めくくった。「皆さんの記憶に残して、広めてほしい」